

郷土室だより

第146号

平成25年6月28日

編集・発行

中央区立 京橋図書館

東京都中央区築地1-1-1

電話 3543-9025

刊行物登録番号 25-031

「変りゆく都市像」(24)

◇二百年前の「武州」

前号では利根川河口の西岸に位置する武蔵国葛飾郡、つまり江戸市街の東方に広がる亀戸地区が、その梅林の活用を経て、どのような形で《都市化》していったかを、『遊歴雑記』の記述で実例的に紹介した。

今度は江戸時代の末期(1850年代前後から)の江戸市街の南方、つまり武州荏原郡の大森・蒲田から、東京湾岸の橘樹郡(川崎・神奈川・鶴見・保土ヶ谷筋)、それに続く久良岐郡では(横浜・金澤にいたる道筋)を描いた『江戸名所図会』に注目する事にする。

順序として、まだこの地区が《都市化》しなかった時期の「近郊地域」の景観を、まず『遊歴雑記』とは対照的な資料としての『江戸名所図会』で見た後に、ふたたび『遊歴雑記』の描写を重ねて見ることにしよう。なお付け加えると1853年(嘉永6年)にペリーが浦賀(相模国三浦郡、ちなみに横須賀・逗子も三浦郡)に上陸して我国に開港をせまったこと

を機会に、三浦半島は近代化の渦巻きに急激に巻き込まれていった。

天下一の繁栄を誇った「お江戸」も、当時の交通の大動脈であった東海道の商品川宿を描く場合に、江戸末期の絵師・長谷川雪旦の挿絵に、はるか元禄に活躍した其角の「品川もつれにめずらしかり(雁)のこえ」と約百年以上も前の句を、幕末の江戸近郊の沿岸漁村・近郊農村の姿の絵に混同させてのせている。

この例に代表されるように「江戸名所図会」の特徴の一つである挿絵とその画中に掲載された詩・和歌・俳句などの制作年代とは、必ずしも同時

代のもものではなかったことを念頭に置かれて鑑賞されることをお勧めする。また挿絵自体も過去を「想像」したもののから、現実のスケッチ作品に至るまでの時間差も認められる。

余計な注釈はさておき、「近郊」の大森でも「浅草海苔」や「麦藁細工」、「和中散」(枇杷の葉などを主材とした生薬、食あたりの妙薬として有名)。蒲田でも梅園が名所で服部嵐雪の「梅干を見知つてゐるか梅の花」といった句が挿絵に添えられているが、前号で見た亀戸の梅園とはだいぶ様子が違うようである。

六郷川(多摩川のこと)河口の羽



江戸東郊の梨園(なしぞの)
(『江戸名所図会』)

田の要島弁財天（本文には「羽田村の南の洲崎にあり。ゆゑに、羽田弁財天とも称せり。この羽田の浦を、扇が浜と号くるゆゑ、このところを要島とよべり」などがある（現在は羽田6丁目）に「玉川弁財天」がある）。

対岸の大師河原の項に寛文9年（1669年）から始まった「塩浜」（塩田）の記述と挿絵があるが、家康が「江戸入り」と同時に、行徳産の塩を江戸に運ぶ水路「小名木川」を造成したことを考えると、両者の《都市的》な役割には大差があったこともわかる。

また「洲河原桃林」の項に「河崎渡し口より大師河原までの間にして、田園ごとごとく桃の樹を栽ゑたり。ゆゑに、開花のときに至れば紅白色を交えて奇観たり」といった風景の記述はあるが、文脈としては産業としての桃の栽培よりも「紅白色を交え」た景觀が先立っていた様でもある。

例外的なのが河崎宿の《奈良茶飯》の万年屋。この店の説明文はないのだが、挿絵のかぎりでは旅姿の男女入り混じり、武家・町人の区別も無かったようだし、タク

シーならぬ辻かごで乗りつける客もあり、右手の土間には美味そう「ひらめ」が届いた光景が拡がっている。

「江戸名所図会」の本質は、地誌（ジオグラフィ）ではなく「寺社事典」だと規定したい私にとつて、この辺の《都市的》景觀の部分はもつとも楽しめる部分でもある。

河崎宿に続き鶴見川の河口付近の市場観音堂は「市場村街道より左の方、一心山専念寺といへる淨刹に安置され」という記述によつて、そこが中世以来の市場が開かれた場所だったと思わせる。あの埼玉県の鷲宮の市場（130号に掲載）を連想させる地形でもあり、次の項「鶴見橋」の説明に付近の川筋の名を挙げ、そのつけたしの《名物米饅頭》の名が食欲をそそらせる。

「鶴見橋」に続く挿絵と説明文の「生麦村しがらき茶店」を描写する「生麦は河崎と神奈川の間宿にて立場なり。此地「しがらき」といへる水茶屋ハ、享保年間廬を開きしより、梅干を齎ぎ梅漬けの生姜を商ふ。往来の人ここに休はざるものなく、今時の繁昌ななめ

らず」とある。

店内はドライブ・イン、つまり辻かごに乗ったまま食卓まで《乗り付けて》飲食できた。ここも武家・町人の身分差はなかったようである。しかし1862年（文久2年）8月21日の茶屋の近くで薩摩藩主の行列を横切った英国商人の一行が、その無礼を怒った藩士に殺傷された生麦事件の現場にもなった。賠償金10万ポンド、幕府はそれを払ってゐる。

横浜市内の「なた彫り」の観音で名高い弘明寺の項に続いて、「杉田村梅園」と「杉田村海鼠製」の見開きの挿絵が続く（318）。「なまこ」製造の場面は文章としての説明は皆無だが、私としては日本海海運の三大商品、長崎貿易における「俵物三品」（いりこ・のしあわび・ふかひれ）と同等の価値を持つナマコの加工現場の挿絵として貴重なものだといいたい。現在の横浜市内の「中華街」の原形は、このナマコ加工場だったときえ思える。その意味でこの絵は《特筆大書》的挿絵なのである。

◇下総の梨産地

以下にこの号の本題ともいえる『遊歴雜記』の梨園の有様を原文のまま紹介しよう。

三十五 下総葛飾郡市川の渡しを越てより、「東の方舟橋の駅まで三里余の間、通り筋の村々農家の庭、背戸、又は畑、山間等一面みな棚を拵え、梨の樹を植て造り出す事夥し、是土地にあうにや、この辺の梨は淡雪と称して、風味又格別也。

既に、やはたの駅橋際、川嶋や十平が宅に旅泊せしに、庭の外空地百四五十坪の内みな梨の樹の棚なり、是程の地処に梨作りて、いか程の要脚（おあし）現金収入、引用者注）を得るやと問ふ、年々百三拾金内外は取揚るなり、とものがたりぬ、壺軒の家すら斯くの如し、三里に余る道路の人家おや。又、舟橋の駅三町目佐渡屋勸兵衛宅に止宿して、二階より背戸の明地を見おろすに、空地悉く梨林ならざるはなし、

武州六郷手前より、川崎宿西の方は鶴見・生麦・子安の辺ま

で、村々通り筋の農家に梨の樹を植て作り出すといへども、その土地にて往來の旅客へひさぐのみにして、下総の葛飾郡に比すれば、九牛の一毛ならん、甲州の外、江戸の近辺にては、下総を第一とし、梨に又数品あるが中にも、水梨・淡雪など、尤も上品にして、この土地の名産たるべし」とある。

◇与力同心大繩拝領屋敷

江戸都市図には「士」と「工商」の身分別に、「寺社」はその《法人名》である寺名と神社名がそれぞれ記載されている。「士」＝武家は公儀の旗本以上、大名、將軍家の親戚筋までがそれぞれの屋敷地にその姓名を冠せられて表示されているのが普通である。

しかし、幕臣の中の最多数を占めた与力（下士官）・同心（兵士）クラスは個人に対しては土地は与えられず、所属する「組」ごとに土地を与えられて（それが「大繩」という表現）、その運営は「組内」の自治に任されていた。

このような産地経営のあり方の差は昭和・平成時代でも街道筋の「道の駅」的な施設でさえもよく見られる現象で、武相では生産者の優位が強かったといえよう。

それよりも私の大きな驚きだったのは「庭の外の空地百四五十坪の内」だけの梨栽培で「年々百二

ており、これが江戸市街地の「町数」増加の最大原因だった。

おおまかな規定の仕方だが町人が自身の地所を持ち寄って「町」を形成したのが「町」、それに対して「組の地所」つまりその地主が与力・同心などの大繩地の場合は、町の形を形成した一郭はことさらに「町」とよばれている。

「ちょう」と「まち」の違いは、町人身分のものが主体のいわゆる《本物》の場所では「ちょう」であり、与力・同心からの貸地の場合「まち」だったのである。

台東区内のJR御徒町駅をはじめ地下鉄の新御徒町・仲御徒町・上野御徒町などの各駅の名は「徒町」＝歩兵部隊の与力（下士官）・同心（兵士）の宿舎だった場所だったことを示す地名である。頭に付けた「御」は公儀の軍隊に対する敬称である。このほか旗・槍・弓・鉄炮（百人組）・持筒などの戦闘部隊や、牛込に多く残った払方町・納戸町・細工町などの事務系の組、本所に多かった賭組（給食・配膳）の集住地区もあった。

同心の給与は平均的には年収にして30俵2人扶持（1人扶持＝1日

玄米5合の現物給与）程度で貧困を極めた（なお特例的だったのは八町堀の町奉行配下の与力・同心で、彼らの場合は裕福であった）。この与力・同心一般の《極端》な低収入状況の対極に、江戸東郊の農家の「年々百二三拾金内外」の《要脚》ぶりは、正に下層武家社会とはケタ違い、梨ならぬブルジョワ革命は成立していたといってもよい状況にあったことがわかる。

それは例えば江戸切絵図で「武家地を代表する図」として売り出された「安政再版番町大絵図」（1864年）を見ると、天正の昔は將軍親衛隊である旗本の集住地帯としての《誇り高き番町》の実態は、実質的には崩壊していたことがわかる。それを土地一筆ごとに具体例を挙げて説明する事も可能だが、ここでは三番町通り＝現靖国通りと分岐する御厩谷をはじめ各交差点には、明らかに旗本身分ではない「名前」や商店が並ぶ状況が読み取れる。

繰り返すがこの格としては武家地の《一等地》の要所で公儀の土地制度は崩壊していた状況を示しているのである。

◇再びフルーツ産地スケッチ

今から僅か半世紀前、高度成長期と呼ばれた我国の経済事情の大変換時期の昭和35年(1960年)から『産経新聞』朝刊に掲載された「東京風土記」は、当時好評で迎えられて、やがて単行本としてまとめられた。わたしも毎回熟読した覚えがあり、その切抜きも作った。

この項を書くのに思い付いてその切抜きを再読してみても、それをこの号に用いた。

引用したのは川崎の上流の当時の南多摩郡①(36年3月14日)。そこは稲城町東部(川崎にかけての「多摩川ナシの産地」が主題)だった。「この町の作付面積は約60ヘクタール、一億円の収入がある。ナシの産地は北海道を除いて全国どの地域にも栽培できるため、その産地も南から北まで幅広くあるが、多摩川ナシは味の点では一番で、神田市場などでもたいへん高値で売られている。これは土が沖積層による砂質土で水はけがよく、しかも水が豊富であることに原因している。日照りが続くとナシ園に水を流し込まねばならないので、

小さな用水路が無数にある。」

「栽培しているナシの種類は「長十郎」が全国の80%をしめているが、その他日本に在る全品種のものを作っている。稲城町で作られた品種が三種もある。清玉(せいぎよく) 加弥(かや) 吉野であるが、清玉は長十郎種と八雲種との交雑で、方法はつぎ木によるものだが(中略)たいへんな手数のかかるものである。加弥ナシは加藤清三氏の加弥園で、吉野ナシは原田正治氏の梨園でそれぞれできたものである。」

「二十世紀も(中略)熟期といえざ大体九月十五日から廿日(中略)。稲城町でも南武線の北側の東長沼が一番早く、山すそが次で、川に面した押立(おしたて)が一番おそい。販売方法は、東京、立川、八王子の市場で、その範囲は広いが、今後は客を稲城に呼び寄せて「もぎ取り」を専門にしたいと考えているとのことである。」

翌日の記事は「上流へ移るナシ畑」。この辺のナシ畑の始まりは「明治の多摩川の大洪水後」で、「最初の本場は明治四十年に川崎市の梨作り名人当麻長次郎が六郷川の大師河原で作った品種が「長十郎」と呼ばれるものである」と始まり、ナシ作りの名人当麻長次郎が六郷川の大師河原で作った品種が「長十郎」と呼ばれるものである」と始まり、

「川崎市が発達にともなって、土地が住宅化する上に、長い間ナシ作りをした土地は生産が悪くなるので、果樹の中心は次第に上流の地に移ってきたのである。水はけの良い桑畑はモモ畑に、水田はナシ畑になり、昭和八年ごろには全耕地の七割は果樹園になった」などとある。

ここで再び「江戸名所図会」六巻(357p)の挿絵「梨園」に眼を戻そう。「真間より八幡へ行く道の間にあり。二月の花盛りは雪を欺くに似たり。李太白の詩に、「李花白雪香ばし」と賦したるも諾(うた)なりかし。」とある。この絵を見て思わず「梨の花つて二月に咲くのか」、もちろん旧暦、今の3月末、いうならば「ソメイヨシノ」と同時期の開花だったろうが、現在としてはこの「二月」は少し早いような気がする。

それはともかくとして『遊歴雑記』の作者敬順が述べたように、梨棚はまことにすがすがしく清潔である。遠くの籠に梨を満載して運ぶ男も、その籠の中の梨も、手前の親子の前の梨の実も大きくて見事である。高下駄を履いて作業する女性は煙管を咥えた男の妻なのである。跡取り坊主も健康そうである。この十二分な裕福さを描いた雪且の筆もまた清潔な空間を形成させている。

：東名高速道工事着手の前の緊急発掘のために、何度も南武線宿河原駅で下車してカーネーション栽培の温室の間を縫って丘陵の頂上へ急いだ。

あこの辺の関東ロータム層の表土の上には石鏟が点在した。：表土1メートルの堆積に1万年かかった計算だと聞かされて、富士の姿を正面にしばし茫然としたことが記憶に残る。

これまで江戸時代の地誌と昭和戦後の「南多摩郡」の地誌の一端を比べ読みの形で紹介してきたが、この53年間を隔てた稲城市の現況の見学を志したが老弱の身には大仕事となって容易に果たせずにいる。

(鈴木理生)